

會



報

1955年11月

182

日本山岳會

一九五六年度

マナスル登山

隊員選考事情

榎 有 恒

第三次マナスル登山隊は今までの隊よりは重荷を負うています。この期待は無理からぬものでありまして、第一に現在の資金關係からみて、引續き今後この登山を繰り返すには非常な困難があり、従つて登山隊派遣については一應の限界に來てゐるということになります。また本會數度の登山隊によつてマナスル登頂可能性が判明すると共に外國の希望者が私達の後を追つてゐることです。山登りの本質からいへば登頂だけがその凡てではないのでありますが、私にはこの現實の事情を無視するわけには參らないのであります。即ち今回は萬難を排して登頂を期し、かつ良い登山を致したいと念願するものであります。

次に今日までの経験では、マナスルはBC以上のアプローチが非常に長いということであり、何れ先遣隊の調査によつて詳細な地形が判明すると思ひますが、この特質を十分考慮しなければならぬことです。即ち限られた短いプレモンスーンの期間中の登攀隊の行動にいささかも、食糧、裝備、燃料などの配置、補給とその連絡に支障が起つてはならないことです。

次に資金面から此度は準備一切より旅行ならびに輸送などに至るまで出来るだけに經濟的に賄ひたいと考えております。

以上の客觀的事情に加ふるに私の希望としては、隊長たる私が老齡であるということは隊の行動にマイナスでありますので、このマイナスを充たして、十分活動出来る隊員を求めたいことであります。すなわち旺盛な健闘の精神と體力との所有者であつて、かつ困難な長期間の行動に隊員として有機的なつながりを持つてゐる人であることであります。

以上の觀點から、私は結局ヒマラヤ登山経験者の中に主として隊員を求めたわけであり、しかしこまで参りましたために私の採りましたことは、隊長をお引受けすると同時に、隊員の入選については日本山岳會の性格上、全國的に優れた登山者の参加を求めたことの考えから、その方法を考えた。しかしこれは餘り散漫におち入る懸念のため、範圍を狭め各支部長に候補者の推せんをお願いしました。幸い多大のご協力を得て多數の推せんを得ました。また一方、時間的、境遇的に第一線で最も活躍している學校山岳部も考えました。ある水準以上の登山者の間に個人差を求めることは殆ど不可能に近いことであります。推せんにあつた人々については慎重に考慮いたしました。こんな場合何時も頭に浮ぶことは、出来るだけ廣範圍の人々にヒマラヤ登山の機會を與えることは、將來に對し大切な種子となるということであり、しかし當初に申し

ました觀點からこのたびはこの考えを割愛しなければならぬと考へました。

また科學班についてであります。が、昨年八月文部省に今回の資金援助をお願いした際、當然科學的調査も重要な一面でありました。主として北海道大學の御好意のもとに研究題目を決定し、申請いたしました。が、本年七月末に同省からこの科學研究の部分は採擇の通知に接しました。甚だ残念なことであり、またこのため御苦心を煩わした北大に對し申謝ない次第であります。が、資金面と外貨許可の限度からこのたびはクライマーに限らざるを得なくなり、またことをご諒承願いたいと存じます。次に學校山岳部であります。候補者として望ましい人達は概ね卒業期と就職期とを控へてゐるため除外いたしました。

以上申し述べた経過をたどりながら發表前に松方ヒマラヤ委員會々長、の諒承と前隊長（在京者）三田氏と成瀬常務理事の諒解を求め、今回の隊員決定に到つた次第であります。ここに各支部長ならびに個人的に優れた登山者をご推せん下さいました各位に對し深くお禮を申し上げますと同時に選考事情を御報告申し上げます（隊員氏名は二頁）

なお準備の方は準備委員會各位の努力によつて順調に豫定通り進んでおります。去る十一月七日運輸省技術研究所において低溫（マイナス四十度）低壓（高度八千米）試験を行い、八、九、十日の三日間富士山八合目にて諸裝備の試験を行いました。

第一回ヒマラヤ委員會

九月十八日本會圖書室で開催、出席委員は別宮、日高、松方、古市、大島、三田、谷口、高木、早川、西澤、篠田、藤島（安）、高山、大室、入澤、成瀬、小原、辰沼、棋の各氏で、議事内容つぎのとおり、一、棋隊長からヒマラヤ委員會委員長として松方氏を推すむね発言あり、一同諒承する。

二、棋隊長より前回登山隊の歸還後今日までの経過について報告

1、前登山隊の歸還前現地における交渉経過

2、西堀、成瀬ミツシヨンの派遣とカトマンズでの交渉経過ならびに右使節のたつた現地狀況の報告など

3、今回の登山隊派遣についての政府の豫算支出に關するいきさつならびに外貨許可

4、先遣隊の入選、派遣に關する報告

5、登山本部の設置、東京驛八重州口日本橋榎町ビル内電話（27）三〇一〇番

三、小原先遣隊員から先遣隊の日程について報告

四、古市委員から募金關係につき報告

第三次マナスル登山募金

第三次マナスル登山の資金については既報のとおり文部省及び毎日新聞社で御援助を願うことになつていますが、本會でも從來の通り會員各位に對し御寄附方を御願ひする次第であります。御寄附に關する事務一切は本會津輕書記が取扱つておりますから本會宛御送金下されば幸甚です。

第三次マナスル

遠征隊員さきまる

第三次マナスル遠征隊員は十一月七日の役員總會で植隊長からつぎの通り發表があつた。一行は明年一月中旬海路出發、三月下旬サマに到着、登はんを行う豫定である。

植有恒61歳、慶大出身、日本山岳會名譽會員、日本山岳會ヒマラヤ登山準備委員長、一九二一年アイガー東山稜初登攀、一九二五年カナディアン・ロッキーズ・アルパタ遠征隊長
小原勝郎43歳、立大出身、東京海上火災代理店主、日本山岳會常務理事、立大出部監督、一九五五年秋マナスル先遣隊長
今西壽雄41歳、京大出身、今西組重役、日本山岳會關西支部理事

カトマンズ通信

小原 勝郎

▼第一信（十月三日夜、カトマンズ、ホテル・ロイヤルにて）

九月二十五日夕刻毎日通信員のダス氏並にNYKの齊田氏に迎えられる。ダム・ダム空港に到着、各新聞社にステーツメントを發表した後カトマンズのスペンセス・ホテルに投宿した。二十六日から十月一日までの六日間は日本總領事、カルカッタ警察、フランス航空代理店のコックス・エンド、キングス・カンパニー、NYK、東京銀行、ネパール領事館、収入税

一九五三年秋京大アンナブルナ遠征隊長として七二〇〇米の最高キャンプに登る、酸素補給器關係を擔當

辰沼廣吉39歳、慶大出身、醫學博士、慶大講師、日本山岳會常務理事、第一次および第二次マナスル隊員、隊員の健康管理、高所人體生理を研究する

千谷壯之助38歳、日大出身、建築士、日本山岳會理事、マナスル遠征隊の實行委員として梱包、輸送方面を擔當

加藤喜一郎34歳、慶大出身、白木屋勤務、第一次、第二次遠征隊員、第一次遠征では頂上攻撃隊リーダーとして七五〇〇米の到達記録を作る、裝備を擔當

村木潤次郎31歳、早大出身、早大動物研究所員、日本山岳會理事、第一次、第二次遠征隊員、裝備、通信を擔當

大塚博美31歳、明大出身、日本

山所會理事、明大山岳部監督、日本山岳會學生部で學生の指導に當る、第二次遠征に参加、裝備擔當

徳永衛司28歳、大阪大出身、大阪大醫學部第一外科勤務、日本山岳會關西支部學生部委員、酸素補給器および醫療擔當

松田雄一25歳、日大出身、日本水産團南丸乗組員として南氷洋捕鯨に二回参加、第二次遠征に参加、裝備および各係間の連絡責任者

日下田實25歳、早大出身、一九五三年一月早大アコンカガ遠征隊員として主峰および南峰に登頂

依田孝喜38歳、中大出身、毎日寫眞部員、第一、第二次遠征に参加し、記録寫眞、映畫を擔當

豫備隊員 石坂昭二郎（日大出身） 橋本誠二（北大出身） 松澤幸雄（慶大出身） 佐伯富男（北大出身） 百瀬孝（早大出身） 佐藤一榮（新潟） 岡村崔（静岡）

また私達は粕谷總領事、有吉東銀支店長、ダス氏、NYK出張所長の齊田氏の自宅に各々招待を受けました。なおカルカッタで印度地質調査所を尋ねた折、ダイクターのジョン・デイ博士より明年の本隊に同行出来る印度の地質調査班を編みたい旨の申出がありました。これは同じルートを出大體同じ時期に歩くというだけのこと、山には勿論登る意圖はありません。しかしテント、スリーピングバック、ピッケルなど全ての裝備を日本のもので揃えたいので、それらのメーカーの名前と場所を知りたいともいつておりました。何れにしても大使館より外務省を通じて公式に依頼するとはいつて

おりましたが、ジョン・デイ博士から直接に私信も届くと思います。（中略）橋本君と私は十月二日カルカッタよりカトマンズへ先發しました。村山君は三日のスペシャル機に積荷をし、書類G・F・フォームを税關から取るためカルカッタに一日残つて四日のためカトマンズに来る者になつております。橋本君と私は十月二日午前十時カルカッタ發、パトナで乗換機を五時間待ち、カトマンズに午後三時に着きました。飛行場にはクリシユナー氏は十人ほどの出迎を受けます。私達は費用の點で當地二流のスノー・ビユー・ホテルを豫定しておりましたが、クリシユナー氏は既にホテル・ロイヤルを豫約したとこのことで二泊だけしてほしいとのことで一應泊ることにしたのでした。その晩早速このホテルでクリシユナー氏からたまたま來合せていたプリンス（一番上）に紹介されて、プリンスからウイスキーのもてなしなど受けました。また私達は大分疲れておりましたが夜遅くシハ氏の家に連れてゆかれ御馳走になつたりピンポンを夫人としたりしてきました。この邊が仲々辛いところであります。

翌三日は朝ガルツェンが、ゲンディ、ラ・ナムギャルとトシを連れて挨拶にやつてきました。彼等は既に當地に來て私達を待つていたそうです。彼等とは簡単に打合せたのみで別れた後私達はクリシユナー氏に伴われ、各官庁の人々に引合されました。午後はスペシャル機の着くころ飛行場に行つたとこころシエルパが荷物の番をしておりました。早速税關に挨拶に

ゆき手續をすませてからトラックで明日私達の引越す家（昨年を使用したというクリシユナー氏の關係のある家）へシエルパに運ばせました。橋本君と私は明朝ホテルを引拂ひ、郊外の家に荷物とシエルパと午後到着するはずの村山君とで山に入る準備をする豫定です。私達は六日にカトマンズを出發する豫定にしておりましたが、それも可能なのですが、クリシユナー氏の主催する日本展覽會がホテル・ロイヤルの廣間で七日に開催され、キングも各大臣も來場されるので是非一日出發を延ばして私達も出席して欲しい旨懇請されたので断り切れず、従つてカトマンズ出發は八日早朝となりました。ポーターについてはやはり當初はネパール人として途中からチベットに變える豫定です。

なおランペール隊はガネツシュに約一カ月前當地をたちました。この隊のマナスルへの轉進は少くともネパール政府では絶対許可可しないし、心配もせぬよういつておりますが、現地は現地の狀態もありまじし、果してどうかと案ぜられます。その他の隊はアルゼンチンのダウラギリのみのようでありマラヤは静かなようであります。（植隊長あて）

第二信

（カトマンズ郊外の家に）

（前略）カルカッタで貨物輸送（チャーター機）の都合で豫定より二日遅れることになつたので、それを取戻すため橋本、小原は先發して十月二日カトマンズのホテル・ロイヤルに入りました。村山君は十月四日追及して來たので、その

す。今のところ雨はありません。ただブリガンダキは水量が多く谷すじは駄目らしいので山まきになるとかも知れませんが、もしそうだとすると、二、三日は餘計にかかるとでしよう。成瀬兄の會われたところジェの人が従者をつれて昨日ここに來ました。今朝また戻りまして、チベタン・ポーターを連れて出迎えるといつていたので、こちらは大事をとりネバリー（當方は）を一人附けて出しました。わいわたのシェルパはできばきと働いております。特にガルツェンは優秀であります。各人の略歴通り相當な顔振れであります。

(サード)ガルツェン 36歳

ア　ピ　ー　54　ブレ　(伊)

マカル　ー　54　ポスト　(佛)

マカル　ー　55　ブレ　(佛)

グンディ 31歳

マナスル 53　ブレ　(日)

アンナプルナ 53　ポスト　(日)

マナスル 54　ブレ　(日)

マカル　ー　55　ブレ　(佛)

ラ・ナムギャル 35歳

ガネツシュ 53　ブレ　(新西蘭)

〃　54　ブレ　(日)

マカル　ー　54　ポスト　(佛)

〃　55　ブレ　(佛)

タシイ 26歳

ダウラギリ 53　ブレ　(瑞西)

ソロコンブ 54　ブレ　(?)

マカル　ー　54　ポスト　(佛)

マカル　ー　55　ブレ　(佛)

東京の本隊の準備も日増しに多忙になつてきたかと思ひます。取急ぎ一筆、會の皆様にくれぐれもよろしくお傳え下さい。

(成瀬、松田兩氏あて)

第三次マナスル登山準備委員會は槇隊長からの委囑によつて次の十二氏で構成されることになつた。

委員長 楨、總務 成瀬、辰沼、村木、松田、行動企画、辰沼、今西(壽)、千谷、加藤(喜)、山田、村木、舟橋、松田、裝備篠田、今西(壽)、辰沼、千谷、加藤(喜)、村木、大塚、徳永、松田、食糧、辰沼、山田、舟橋、石坂、松澤、日下田、醫藥、辰沼、徳永、寫眞、依田、松田、現地準備 小原、橋本、村山

ヒマラヤ委員長追加

前號會報紙上で發表したヒマラヤ委員會委員長にその後今西錦司、田口二郎兩氏が追加された。

九月二十八日、ネパールの王弟ヒマラヤ・ビル・ピクラム・シヤ・デヴァ殿下とギリヤ同妃殿下が来朝した。兩殿下の今回の来日は非公式なものであつたが、本會ではネパール國年來の厚意に對して謝意を表するため同日羽田空港に別宮會長、日高副會長、榎第三次マナスル遠征隊長、三田前隊長、成瀬常務理事が出迎えた。

兩殿下は十月三日天皇陛下に拝謁を賜わり、五日、皇太后殿下の午餐會に出席、本會では十月六日午後七時から三田の三井クラブで歡迎パーティを開催した。當日は秩父宮妃殿下も御出席され談話に時を過ぎた。乾杯の後殿下は寫

眞を持ち出し、思い出を語る隊員たち。に終始笑顔であいづちをうたれていた。兩殿下は七日關西に向つていた。後十一日夜、羽田發のインド航空機で歸國した。

第一六七回 七月二十九日(金)
體協會議室『マナスル登山に對
し、ネパール現地調査報告』

體協會議室「登山用ナイロンザイルについて」篠田 軍治氏
ナイロンザイルの長短特質について詳細な研究結果の發表があつたが、未だ種々問題が多いだけに活潑なる質疑應答が展開された。
なおせつかく持参したといったフイ

ルムも司會者の手落により映寫出來なかつたことを御詫びする。

臨時 九月二十九日（木）

1 アフガニスタンの蒙古人
2 カラコラムの旅 岩村 忍氏
3 小麦の發祥地 今西 錦司氏

3 小麥の發祥地

木原 均氏

隊の成果を、各専門の立場から

スライドを交えて興味深く話され

會報一七九號に望月さんもカラコラム隊への期待として

書かれたように目的は學術探検だ

が行く場所が登山者垂涎の地で云

と、大いに期待していたが、コ

ド・コック、ガツンヤ、グレム等

第一級の山々の景観は矢張り王

曲的なものがあつた。(K・O記)

たかはこ

名人気質の店

本店、四谷、大蔵省横入ル
TEL. (03) 1912

支店 八重州口第2鉄鋼ビル前
TEL (07) 1560

カワミヤのアルパインソール
耐久・不磨耗・滑止
あらゆる点で NO 1
合資会社 代表 平林三郎
カワミヤ靴店
東京都大田区大森 8~3740
TEL (76) 5882

体験二〇年
 注文至急製作
 スキー靴
 登山靴
 ハイキング靴
 カタログ巻経



第十回國民體育大會登山の報告

渡辺 公平

第十回國民體育大會登山部門は十月三十日より十一月三日まで神奈川縣丹澤山を中心として行われた。

徳島縣を除く各都道府縣より、各監督(兼リーダー)一、選手四名が参加、晴天に恵れ、十分その目的を達した。

行動概要を記すと――

▼十月三十日 晴

七時、横濱市伊勢山大神宮廣場において出發準備會を開催、参加人員を確認の後、大會名譽會長武田久吉、會長別宮貞俊、横濱市長平沼亮三各氏から挨拶が、また尾關大會委員長、渡邊技術委員長から注意があつた後、三ツ澤競技場における大會開會式に臨んだ。

開會式は天皇、皇后兩陛下をお迎えして十時より盛大に行われ、登山部門選手役員も各都道府縣代表團に加つてその感激にひたつた。

開會式終了後、A B C の三班は相模鐵道和田驛に行進、臨時電車で山麓に向い、またD班は東神奈川驛から國電横濱線で宿營地に向つた。

▼十月三十一日 曇

A 班

伊勢原町大山―大山々頂―ヤビツ峠―三ノ塔―行者岳―塔ヶ岳尊佛山莊泊

B 班

大山―大山々頂―諸戸(トラツク)―青藤―場石―本間ノ頭―丹澤山頂幕營

C 班

落合―林道終點―白石峠―加入道山―大室山―犬越路―長者舎山莊泊

D 班

鳥屋―柏原ノ頭―焼山分岐點―キビガラ―八丁坂ノ頭―姫次平―原小屋平、原小屋山莊泊

▼十一月一日 晴

A 班

尊佛山莊―丹澤山―棚澤ノ頭―姪ヶ岳―白ヶ岳―金山谷乗越―ユ―シン山の家泊

B 班

丹澤山―姪ヶ岳―白ヶ岳―神ノ川乗越―檜洞丸―ヤタ澤分岐點―犬越路―長者舎山莊泊

C 班

長者舎山莊―風巻ノ頭―袖平ノ頭―原小屋平―姪ヶ岳―丹澤山幕營地

D 班

原小屋平―姪ヶ岳―丹澤山―塔ヶ岳尊佛山莊泊

▼十一月二日 晴

A 班

ユ―シン山の家―金山谷乗越―檜洞丸―石棚ノ頭―中ノ澤休泊所―小川谷合―玄倉(バス)―新松田(電車)―小田原(バス)―湯ヶ原泊

B 班

長者舎山莊―犬越路―大室山―加入道―白石峠―東澤出合―箒澤(バス)―湯ヶ原泊(電車)―小田原(バス)―新松田泊

C 班

長者舎山莊泊

丹澤山―塔ヶ岳―鳥尾山―三ノ塔―富士見橋―ヤビツ峠―雙毛(バス)―大秦野(電車)―小田原(バス)―湯ヶ原泊

D 班

塔ヶ岳―鍋割山―雨山―檜岳―伊勢澤ノ頭―秦野峠―宇津茂―中山峠―湯澤(電車)―小田原(バス)―湯ヶ原泊

▼十一月三日 晴

十時半より湯ヶ原小學校講堂で閉會式を舉行、神奈川縣知事、湯ヶ原町長挨拶の後、別宮會長、渡邊技術委員長及び各チーフリーダーの講評、選手代表の挨拶があり尾關大會副委員長閉會の挨拶があつて式を閉じ、五日間にわたる大會は無事故のうちに終了した。

講評

渡邊技術委員長

選手監督諸氏は三日間の行動を通じて國體登山の特殊性といふことを十分経験し認識されたこと、と思う。山麓ではどのパーティにも至るところで歓迎を受け、山に入つては、山に精通した役員諸氏が付けられ、宿營地では水を得ることの困難なることをもつて特色とする丹澤の尾根歩きにおいて水に何等の不安不自由を感じることなくしかも設營地の至れり、盡せりといふ受入態勢の中で安眠することが出来たのである。

こういう登山は、諸氏自身の山登りの中においても特殊なものであり、恐らく國體を除いては経験することの先ずない豪遊的登山といわねばならない。

これは時間の節約とか、大部隊

による混亂の回避とか、行動の能率化を優先的に考へた結果の止むを得ない措置であるが、このことは、そもそも國民體育大會の登山が、スポーツとしての山登りではなく、お祭騒ぎの氣分の濃厚な行事であるかの如き錯覺を生み易い危険があるのである。

しかし、物見遊山のような登山行事にだれが、どこの府縣民が、都道民が大切な血のような税金を割いてくれるであらうか。

プログラム(大會の)に書いておいたように、國體の登山は競技ではもちろんないが、あくまでもスポーツであることを私は強調しておきたいと思う。

國體登山の形式といふものは、昨年の北海道の如く、また今年の丹澤の如く、山の性格その他の條件によつて年によつて異なることがあるけれども、その精神と目的においてはいさゝかの變るところはないのである。

以上のような觀點から今回は各コース毎にチーフリーダーから講評が行われるが、批判のないところに進歩はあり得ない。批判はあらゆる場合において進歩の母である。

國體登山に参加することによつて、全國各地区における登山技術の水準が向上してきている事實をかつて國體に参加した各地方の人々から聞き、國體登山が決して無意義でないことをわれわれは認めているのである。

そういう意味において選手諸氏は謙虚にチーフリーダーの講評を聞いてもらいたい。

術、裝備には進歩、向上の跡が見えるのは當然のことでもあるが、今回は特に若い人達が多いようであり、よくリーダーに協力すると共に、反面他隊とも協調していることが認められた。

チームワークについても從來より良くなつてゐる點が認められるが、リーダーシップに関しては未だ十分でない點が見受けられた。例えば、リーダーの位置である。

リーダーは隊の掌握を主眼とする場合には、最後尾に位置するものが便利であり、またメンバーの指導に主眼をおく場合には二番目に位置して、先頭者を逐次交替させるのが便利である。

ところが、リーダーの中にはただ漫然と先頭に立つてゐる人がまま見受けられた。これでは隊の歩度の調節は出来ても、隊の觀察、指導を行ふには適切ではない。

またこれと反對に隊の掌握を重く考えすぎて、隊員の間隔が小さくなりすぎ、歩度の調節を困難ならしめていたリーダーもあつた。今後研究を要する點であらう。

最後に本大會の運営に當られた神奈川岳連及びそれに絶大な協力を惜しまれなかつた通信、救護、輸送その他の人々の久しきに亘る見えざる努力に對して心から敬意と感謝の意を表する。

技術役員

今回は登山部門國體委員會において協議した結果、サブリーダー四名を除き、他は岳連側に出してもらい老大な編成となつた。リーダー諸君はもろろん、そのアシスタントとして活動して頂いた補導、設營、連絡の各位に改めて感謝

謝の意を表したい。

チーフ L

サブ L

A 班 梶本徳次郎

村木庸益

B 班 中山政雄

天野春男

C 班 齊藤清太郎

石坂昭二郎

D 班 星野 重

奥野幸道

な

松澤幸雄

な

石田久夫

な

犬塚博美

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

な

大塚良一

西穂高における 遭難対策講習會

金坂 一郎

北アルプス遭難対策協議會より
信濃支部後援の下に遭難救援に關
する講習會講師派遣が要請され
た。以下はその簡単な出張報告で
ある。

十月十四日より三日間、西穂高を中心として、参加者豊科警察署長以下警察官六名、豊科山岳會七名、サブリーダーとして信濃支部の林利春氏を煩した。日数が少く、遭難対策の含む問題は深刻でかつ廣範圍にわたり、しかも参加者のレヴェルを初心者におけるといふお話を、講習内容の準備に窮したが、結果としては警察官の職務、例えば現地調査、検案等の任務遂行上の必要から考えて、登山に關する浅くとも廣範圍な問題を知つて頂くことにした。しかし山岳地帯駐在警察官としては、経験の浅い登山者に對して指導したり注意を與える必要にもしばしばせまられるので、山の歩き方の基本の問題については相當つづこんだ所まで研究しておく必要がある。これは學課と同時に山行中の行動によつて身をもつて體得して頂くように心掛けた。淺學非才講師としてはとてもこのような大きな問題と取りくむ資格はなかつたのであるが、参加者の絶大なる熱意により、三日目の下山時には各種動作歩き方といふ、荷のバックキングといふ、こちらがきかれるほどの上達ぶりであつた。

學課としては登山の危険及び山岳地帯地元における遭難対策組織の問題をテーマとしたが、前者については従来の氣象とか落石のよくな山そのもの、持つ危険とは別に、遭難するのは山ではなく登山者であるという観点から、登山者そのものがはらんでいく精神的、肉體的危険を主眼に論じたが、頭だけでなく體でも考えて頂きたいという見地から、改めて講座を設

けた學課以外にも随時懇談的に語り合つた。實課としては無雪期の登山(西穂登頂)、綱についてはコンティニューアスの登降、制動確保による後續者の確保、懸垂等、幕営は西穂小屋附近で行つた。

北アルプス遭難対策協議會は事務所を豊科警察署におき、今春千野署長を委員長に發足、登山事故の捜索、救助、防止等を目的とし、會員としては警察管区(南安曇全郡、即ち蕪、穂、穂高、乗鞍以西)内の登山に關係ある官公署、山岳會、業者等を廣く集め、またその一組織として救助隊を有し、關係者の要請または委員會の判斷に基づいて出動することになつてゐる。現在の所積雪期の遭難対策については幾分困難があるようであるが、今回に引續き山スキー及び夏の堅雪について講習會を持てば、立派な救助隊が完成することであらう。

この対策協議會に警察が關係しているといふことは、實はかくれた意味がある。遭難に際して救助隊が事故を起こす程つまらないこととはないが、救助隊は豫備知識なしに最悪の條件下に飛びこみ、一般の登山者とは別の危険を冒すことが多いので、従来より救助隊の遭難例は多い。遭難を起こしてしまつてからでは始まらないことかも知れないが、これに對して補償でも得られたら大變結構なことでも救助隊が豫め警察の要請によつて出動し、警察官に協力するといふ形をとつておけば、萬一の場合に法律によつて國家補償が得られる。これは豊科の場合に限らぬことで救援に出動する人達に是非

知つておいて頂きたいことである。

各山岳地帯に強力な遭難救助隊が出来るということは、我々登山者にとつて大變有難いことであるが、山案内でさえ低調な昨今のこと故、これは一般に望む方が無理であらう。しかし登山者としては救助隊の現地出動以外に地元關係者に望む所は多い。例えば交通、通信に關する便宜、火葬その他の事後處理、殊に不慣れた遺族關係者に事務、渉外關係の適切な助言、援助等、また遭難關係者は大部分の者がその處理に慣れていないはずであるから餘計な出費を少くするとか、豫想されるトラブルを避けるとか、その方面での指導、援助についで、地元當事者に希望したいことは数多い。この點については各山岳地帯にある登山團體が中心となつて、組織的な態勢をとつて頂ければと考える。

なお今回の出張に際して、富士山で使つたゾンデ(雪崩搜索用の鐵棒)をこの方面に配置することに決定した。これは日大山岳部から五〇六〇本寄贈し、信濃支部において適切な配置を考えて頂くことになつてゐるので、細部決定次第報告したいと考えているが、殘餘のゾンデについても早く適當な管理者が出て頂ければ幸いである。

今回の講習會については信濃支部林利春氏に大變お骨折を頂き、また上高地の木村殖氏、西穂高山莊の村上守氏にも大變お世話になりました。講習會を運営することが出来た。こゝに厚い謝意を表して報告を終る。

1956 年版

アルパインカレンダー

山と溪谷社編

塚本閻治監修

¥ 380 (〒 32)

20余年の歴史を持つ山溪版アルパインカレンダーは55年版より一層素晴らしい企劃と内容を盛つて遂に完成、只今發賣されております。

本書は九州より北海道に至る全日本の名山を四季に配列し、その間に日記欄がありましてので寫眞を樂しみながらメモをとれる仕組みになつております。

原色版 16 頁・寫眞版 14 頁
グラビア版 32 頁・日記欄
58 頁・寫眞データ解説 7 頁

山と溪谷社
東京銀座八・出雲ビル
板橋東京六〇二四九

春の西穂

より槍へ

立大山岳部

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆

昨冬後立山縦走に成功した部は去年の課題を解決してここに新しく發展する段階に入り器具も一段の整備をみたので戦後始めて穂高へ極地法で入る計畫を立てた。或る程度技術的な、しかも全員全力をあげてぶつかつてゆけるだけの大ききをもつところ、それはまた上下を通じて激しき、試練を求めるといふことなのである。私達の眼は期せずして西穂から槍に至るあの長い鋭い稜線に集り、対象をここに求め、秋の荷上げ、偵察を行い十五名で三十五日間を豫定し昨冬西穂山莊をB Hとし五カ所にキャンプを設け槍を狙つた。しかし戸山高校生の事故に遭遇した結果奥穂アタックのみで計畫を中止し春に計畫を變更することになった。

春は卒業期のため参加者が減り極地法は不可能となつたが、ここを往復したい私達の考えは變らずC Iを西穂、C IIを天狗のホルに設け一應極地法形式で穂高小舎に荷を上げ、全員穂高小舎へ集結した後三名が北穂小舎より槍をアタックすることに決めた。行動日數十三日、全期間二十五日と豫定。パーティは次のとおり編成した。

一、北穂ザイル工作完了まで、A班(工作隊)後藤、山野井、馬淵 B班(サポート隊)寺畑(チーフ・リーダー)太田、川

島、峰坂、馬淵、淺古、堀
二、槍ヶ岳アタック隊 後藤、山野井、太田
三、前穂アタック隊 寺畑、太田、川島、峰坂、淺古、堀

し全員C IIに集結す。
十五日 雨 滞在。
十六日 曇り C IIを撤收し全員穂高小舎に入る。新人連はジャン、ロバの耳のトラバースに極度に緊張する。A隊は山野井が太田に代り酒澤岳の下降に三十米二本を固定して小舎に引返す。

在は落つかない。穂高小舎では相變らずの悪天候にアタック隊を案じて一日を過した。
二十二日 曇後吹雪 二時眼が覺める。北穂小舎發五・三〇、天候は少しづつよくなる模様、北壁は前日とは比較にならないほどよい。フィックスド・ロープを傳つてルンゼに入り、カールの底より大キレットに出る。ここにビグワイクの用意に持参した荷を置き、壁に取付き、南岳で食事をし、七・四〇。槍の穂の登りは思つた通りの快適さに気分を出しつ

二十五日 雪ガス 滞在。食糧事情は悪化の一途をたどり、穂高小舎のパーティはまた重なる滞在から身體をもて餘す。
二十六日 曇後晴 朝の模様では滞在ときめたが、良くなつたのでC IIへ全員下る。重なる滞中に身體は全く不調、奥穂の登りでアゴを出す。グラートツルムを下ればロバの耳に達する。フィックスド・ロープは寺畑、山野井で外し天狗のホルに下り、C IIを再建設して全員泊る。

五日 寺畑以下九名新宿發。
六日 上高地入り。
七日 西穂山莊入り。
八日 晴 工作隊を先頭に山莊發、西穂の下り三十米一本を固定し次のピークに六人用一張建設しB隊は下る。A隊はさらにC I直下に三十米、信州側のトラバースに三十米、間ノ岳二峰の下りに三十米各一本固定しC Iに戻る。
九日 晴時々風雪 A隊天狗岩の登りと天狗のホルへの下りに各三十米一本固定、ホルに荷を置きC Iに歸り、B隊は山莊よりC Iに荷上げに往復。

十八日 雪 全員小舎滞在。
十九日 晴 アタック隊北穂高小舎に入り他は北穂登頂を兼ねてサポート、北穂小舎を掘り出すあいだ後藤、山野井は北壁の偵察に出かける。北壁は最悪の状態に極度の緊張を強いられ真直に下れない。ルートにつまつたので引返し北壁と龍谷のリッジ通しに下る。夏路の針金のあるところまでがヤマで飛驒泣きに三十米一本を固定しルートの見通しをつけて引返した。サポート隊は奥穂小舎に戻つた。

二十日 雪 二時起床、星が輝いている。勇んで用意し四時三十分外に出れば残念にも雪と化しており滞在と決める。奥穂小舎隊も天候を心配しながら滞在。
二十一日 雪 アタック前の滞在は落つかない。穂高小舎では相變らずの悪天候にアタック隊を案じて一日を過した。
二十二日 曇後吹雪 二時眼が覺める。北穂小舎發五・三〇、天候は少しづつよくなる模様、北壁は前日とは比較にならないほどよい。フィックスド・ロープを傳つてルンゼに入り、カールの底より大キレットに出る。ここにビグワイクの用意に持参した荷を置き、壁に取付き、南岳で食事をし、七・四〇。槍の穂の登りは思つた通りの快適さに気分を出しつ

二十七日 晴 C IIを撤收してB Hへ、寺畑、山野井はザイルを撤收し、他はC IIを撤收しC Iに至り、C Iの荷を加えて獨標で待ち全員集つて西穂高山莊に泊る。
二十八日 B Hより上高地を二往復して荷を下す。
二十九日 上高地より松本に下り解散する。

支部長懇談會

昨年に引續き恒例により第二回の懇談會を九月十八日(日)午後二時からルムで開催した。別宮會長より挨拶ののち各支部の活動状況、岳連關係など諸問題につき意見の交換があつた。

出席者

篠田(關西)藤島(越後)高山(信濃)大室(静岡)各支部長及び關西、から高木、靜岡の牧野の諸氏、本部側より、別宮會長日高、松方副會長、沼井、神谷評議員、入澤、成瀬、小原、渡邊、辰沼、千谷、折井理事、石原監事。

戦後最初の アムネ・マチン探検

Ⅳ

吉澤一郎

一九四九年五月五日の未明、土民チュー・ツェリンを先頭に、土民探検隊はグー山脈の基部を右側（南）にし、東方に向つて前進していった。

間もなく夜明け、太陽は真直前方の山の上に顔を出した。午前十時、北東に當つて雪に被われた一本の山脈が、ガラスのようにはつきりと現われる。その南側で東方に方向を變える。ルートは、春に氷河から融けた水流に浸蝕された廣い平らな河床に沿っている。あたりに注意を拂いながら、アムネ・マチンの最初の北壁を横切つて行く。まだゴロクは現れない。静寂と距離が、この巨大な山塊を支配している特徴である。土と石は輝くような赤や褐色、黒、黄、桃色といった多彩な色からなっている。やがてはじめて人のいた形跡を発見した。燃料用のヤク糞が三呎の高さに積み上げられている。氷に覆われは小流を渡る。

午後三時五十分、三百頭以上の

群の中から、二頭の若い大角牡羊を射止めた。

大角羊の頭で飾られた石のオボのある峠を越える。この峠の下で南東に數哩離れたところにある二つの雪峰（約四九〇〇米）を寫真にとる。その裏にまだ幾つかの峰が隠されているらしい。この邊はまだ四一〇〇米。

それから西側に桃色の絶壁をめぐらし、高みに氷河と雪を載せた廣い峡谷を発見してそれに入つて行く。水流は深く急で危険であつた。

水を離れると今度はかなり廣い沖積層の溪谷に入る。周囲はかなり大きな山また山に囲まれている。

新しい雪山や峰頂が見え出したのは午後五時十五分であつた。溪谷を下るにつれて北方及び南方に今までどんな探検家も眼にしたことのない無名の山脈が現われて来た。それから後で再び東方に、鋸歯のような岩稜をもち、クレパスのある氷雪の山脈が眼に入つた。

偵察隊がヤクに乗つた一人の老人を捕えた。それはゴロクの牧人だつた。彼によるとこの峡谷と溪谷はニエン・ダー（意味不明）と呼ぶという。彼がビツクリしているところを見ると、まだゴロクたちはクラーク隊の接近を感じていないらしい。熊の足跡が到るところにある。

この峡谷の下端の平地にC13（三九八〇米）を設ける。托索泊から四十哩来たわけだ。足下には幅五〇—一三〇呎のかなり大きな河が東流している。これはアムネ・マチン山脈の北側を東流し、拉加

寺（同徳）の北西で黄河に入るチエブ河である。（ロックの略圖にもあり）燈をつけると危険なのでノートは毛布の中で懐中電燈をつけたがしらためる。

五月六日（金）六時半出發。や北に曲る河から離れ、山稜を越えて東へ向う。午前八時三十五分山稜の上から東方や右手に、真中に大きな鞍部のある圓いドーム型の白い山を眼にした。アムネ・マチン、アムネ・マチンだ。同行のチベット族達が一勢に叫んだ。

北方には、陽光に輝くその前衛雪峰が並んでいる。雲が一つもない。さもなくば危く見過してしまふところであつた。その北西胸壁下に、七〇〇—七五〇頭の獸群を見る。

十二時、射殺したキャンの皮を剥いて三人のゴロク族に遇う。鼻筋が通るか高く、北米インディアンか褐色コーカサス人か或は北インドでみるアリアン型の顔をしていた。

十二時四十分、溪谷の末端で馬を下り、C14（三九五〇米）を建てる。ここはギトンという河の西岸である。この河は北方の氷蝕されたニエンチャ河に注いで、北東にこの二つは一緒になつて、北東に礫岩層の地域を百碼の幅で流れ下っている。チエブ河の一大支流と思われる。

周囲に集つて来たゴロク達は皆幅廣の刀剣と鐵砲を携いでいた。これらの武器は蓋古多と打箭爐の間にある徳格から移入したものらしい。犬がひつつきりなしに咆えて

アムネ・マチンの眞の基部までは、ギトン河を越えて僅かに二哩しかない。泊地の北にはイランという山がある。

他の隊員がキャンの仕事をしている間にクラークらは、山と五哩離れた場所から最初の測量を開始する。昔のラサ街道はこの邊を通つていたものらしい。

アムネ・マチンの上部は北西から見ると、雪と氷に覆われたドーム型の峰頂をなし、可なり急峻な山容を現わし、鞍部で結ばれた北峰は南峰よりもやや低い。

測量した地點は、他の四つの峰アムネ・マチンそのものの二点、南西にある一峰、北側の割れ目の縁にある一峰、その割れ目の最東端の頭、都合九カ所である。

この邊のゴロクはカグルマ族といふ、その中の老人のいうところによつて附近にある峰頂の名稱を示すと左の如くなる。

アムネ・マチンの直く東にあるのがジェガルデン（白い岩）、同じ方向にゴムツン、南にトケル・イブジン・ノウ（貴重な石の前にある場所）、西にシュンウ・ン・ジェガラン（神の叔父）、南西にイエヴ・セレンガジェヴ（神峰の父）。

彼はこれらの峰々には一度も雪崩というものが出たことがないといふが、アムネ・マチンの兩主峰の間にはそれらしいものの痕跡が望遠鏡によつて認められた。

ジョゼフ・F・ロックはドランデル・ルン・シュク、アムニイ・マチエン、シェンレシーの名を擧げているが、ゴロクの種族によつて山の呼び名が異つているのかも

知れない。

カグルマ・ゴロク族によると、聖山 Amnyi Kmachin（プロク（發音）の意味は、最も偉大な神の名前、この世界の神、峰々の祖父、黄河の祖父など色々になつてゐる。なおアムニイ・ルマチンと大きく口に出してこの聖山を呼ぶことは、ゴロクのタブーにはなつていないらしい。

この老人は、途中でゴロク達が待伏せしているかも知れないから来る時に通つて来た「門番のオボ」峠を越えないで、アムニイ・ルマチンへ、献げ物をしたら一刻も早く異う道から去るよう、と忠告してくれた。

隊員の多くは早速戻ることを主張したが、クラークはアムネ・マチンの北及び北東部を測量するまでは歸らないと頑張つた。

かくて五月七日（土）の午前七時四十五分、武裝した隊員十名を伴ひ、狭間の奥に達して主峰の向側にあるものを見るためC14をあとにした。

最初ギトン河を渡つて三十分間は北に向い、次に東へ三十分、最後に狭間の廣い底を南東に進んで行つた。隊員達はドルジェが方位測定をする間時々立停つた。鞍部をもつ双峰の山を見る。これも南峰の方が少し高い。

恐ろしい静寂が聖山を包む時がしばしばある。今やアムネ・マチンの根本までは僅かに二哩、時には一哩くらいの時もあつた。巨大な山稜と深くえぐられた峡谷と折々に氷河を懸けた白い峰が上へ上へと重なり合つていた。立止つてはこれらを測量する。（つづく）



通信員

木暮氏記念碑を訪ねて

沼倉寛二郎

久方ぶりに晴れた九月の連休に山梨縣體育大會をかね縣岳連團體豫選會に本部より特別参加を要請されたので、支部長三井氏と甲府驛で落合い非崎から含有量世界一といわれるラジウム鉱泉までの一時間餘りバスにゆられ、途中、道仙峽の溪谷をめぐる、仲々捨てがたい。津金嶺で畫食を攝り、女中に木暮氏碑を尋ねたが、ちんぷんかんの返事。もとも土地の者にも餘り知られていない様子である。鉱泉から本谷に沿うて金山部落まで(約六キロ)きはだ、もみぶなど樹林は素朴な本谷の美しさとともに仲々立派である。

素朴な百姓風の有井館をぬけると右金峰左に小暮様碑(餘計なことであつたが歸途木暮氏の略歴をたゞめ有井館女主人に道標にと依頼して来た)へと指標にするしあつたが訪れる者も少いせいか荒れた金山跡の自然岩に『みつかり山』方向に打込まれた記念碑がうす暗く讀みとれなく何か淋しい

氣がした。來年は十三回忌であるとのこと、山梨支部主催で記念山行をかね、十三回忌祭に適當の地に建替えることが出来ればと三井會長と話し合つたところ、何とか來年の五月頃までは考慮したいと約されたが、是非新緑の五月頃に記念山行をかね「忌祭」を全國の岳人に呼びかけ御協力を願つて盛大に實現したいものである。

なおこの計畫を當時の記念碑建立發起人の神谷氏らに早速計つたら大いに乗り氣であつた。

會員計報

生駒高常氏(會員番號四一六一番)昭和三十年十月十六日東京田園調布二ノ六九五の自宅で死去された。本會から津輕書記が十九日の告別式に参加、哀悼の意を表した。

本會から生きてきたまで去つて行つた人々は決して少くはないが、當然入會されるべき山歴の性格を持たれたがら中々會員となる機會に恵まれない方々もまゝある。新しき故人生駒氏もそういう後の場合の岳人であつた。享年六十六歳現日高副會長より一高・東大で少し先輩の長である。氏の學生時代そして青壯年時代の登山活動については殆ど知られていない。

氏の登山家及び登山指導者としての名聲實力は實に大正十四・五年の頃から臺灣において發揚された。總督府の要職にあつた地位も幸いであつたが、氏に夙に愛好實踐獎勵したホッケ競技と共に登山氣風を作興を一顧、當時會員だつた杉本良氏及び筆者などかつて臺灣山岳會を創設した。これは

大正十五年末のことであつたが、その夏にはすでに臺北一中登山隊の陣頭に立つて雄峰南湖大山へアマチュアリズムの句の高いスポーツ登山を果していた。昭和二年の八月には生駒氏を總指揮隊長として筆者をいはゞ登攀隊長として臺灣山岳會の一行が大霸夷山の巨岩峰に眞に人類としての初登頂を成就した。生駒氏を見るからに失禮を貯えた偉丈夫で、同行のタイヤル族蕃人達もこの壯舉のリーダーに心から畏敬したようであつた。臺北近郊の小登山でも常に生駒氏の積極精神に溢れて未知の岩壁、山稜、溪谷が次々とトレースされて行つた。この絶好の臺灣登山界指導者も臺灣及び内地の知事または拓務省管理局長、滿洲での要職、會社社長などの忙線につくことによつて登山界の第一線には出られなくなつたが、常に山のよさを忘れられず時折内地所々の山にも行かれて、筆者もその便りをもらつたこともある。昨年三月ようやく筆者のおすゝめが効を奏して正式入會されたが、二年を経ずして君を鬼籍に入らしめるとはいたましい限りである。筆者個人の君と共にあつた山行その他の思い出は數々ある。しかしその思い出を貫く君の風格を要すれば、最もスポーツマンであり積極性理想家肌の萬年青年的登山家であり大指導家的包容力を兼ね備えた明快な人物であつた。こう慨せよ。

(沼井鐵太郎)

貴堂武時氏(舊姓島田)(會員番號一二三八番)かねて病氣療養中のところ十月七日逝去された。氏は法政大學山岳部OBで富山支部

圖書紹介

ギド・レイ全集

イタリア山岳會トリノ支部後援の下に全集の第一巻が一九五三年三月トリノ市のヴィリョング書店から出版されたことは會報一七一號で報じたが、その後順次刊行がはかどつて昨年十一月第四巻を送り出して完了した。

原田駐伊大使の好意で手に入れた特製本はA11版無地の麻表紙に淺みどりで表題を打ちこみ、カバーはそれぞれ(一)マッターホルン(二)チモン・デラ・パラ(三)グラント・デヨラス北壁(四)モン・ヴィゾの油畫を四色刷したもの、通巻一二三九頁の堂々たるもの。内容さし書とも原書を忠實に再現したばかりとなつた寫眞十九を加え第四巻巻頭のアルパ・アルピナ(アルプスのあけぼの)の一篇には故人校園ずみ未發表の一章を添えて若き日の自敘傳を補完し、またふるいイタリア山岳會會報などから四篇をぬき出し、かくてレイの著作の殆ど全部を網羅した。なお著四巻にはレイの青、壯、老各時代のすがた六や、かれの手になるスケッチ十四ペン畫二をはさみ、かれとアルピニズム・アクロバチコを行を共にした親しい岳友ウゴ・デ・アマチスの追憶文(一九三六年山岳會會報所載)と本全集の監修者アドルフ・バリアノ書き下しの百十頁にわたるレイの評傳とを掲げ、詳細な著作解説目録(英

佛獨譯書をふくむ)、レイ著作中の引用書目、索引などを附して完璧を期している。

ギド・レイ逝いて正に二十年、山岳書のクラシックといわれるかれの原書が手にいれなくなつた今日かかる良心的な全集の刊行が完成して、一九〇〇年を中心とした一世代にわたる新らしい登山の黎明期にかややかしいあとをのこした「マッターホルンの詩人」をしのぶよすがを與えてくれたことは心からのよろこびである。(日高)

積雪期登山

山崎安治 近藤 等 編

夏山やスキーの技術書はずい分店頭に見受けるが、本格的な雪の山に登る技術書は戦後皆無といつてよい。その要望にこたえて今度發行されたものが本書である。内容は日本の冬の山(關根)本邦における積雪期登山小史(山崎)トレーニング論(關根)登降技術(日下田)高所露營(塚本)裝備(村木)食糧(今村俊)燃料(八島)計畫の立て方(杉本)積雪期における登山の實際(山崎)危險について(吉阪、今村正、山崎)通信(今村正)で執筆者は何れも早大山岳部出身の本會々員である。

特に登山の實際では穂高岳周邊劍岳周邊について實際の記録にいろいろの説明を加えており、登山史的な面からも充實した内容である。スポーツとしての本當の登山がどのようなものか知る上においても是非一讀をすすめたい。(T)朋文堂發行、二一四頁、口繪七枚、定價二五〇圓

穂高岳の早期登山者 (二)

山崎 安治

三、ウェストンの穂高登山

穂高山群には明治十三年(一九〇八年)ごろ、大阪造幣廳冶金技師ウィリアム・ガウランドが嘉門次を先達として明神から前穂にかけて足跡をのこしたといわれているが、これに關するはつきりした記録はまだ眼にしていない。この山塊に初めて足を踏み入れた記録としては、英國宣教師ウォルター・ウェストン師の第一回槍ヶ岳登山をあげなければならぬであろう(15)。明治二十四年(一九〇一年)ウェストンは當時山陽鐵道會社の顧問技師H・W・ベルチャーと共に徳本峠をこえて峠下の牛番小舎(16)に泊り、三名の獵師を案内として八月五日槍ヶ岳に向つて出發した。『その三人のうち一番年長者は輕快な活潑な男で既に二度も槍ヶ岳に登つたことがある』とウェストンは書いていたが、その名前は記されていない。一行はこれまで槍ヶ岳登山者がとつていた槍澤によらず、横尾谷からの新しい登路を選んだのである。横尾谷の入口から『半哩かそこら歩いて行くと峡谷の中腹に在る洞穴に達した』といふ横尾岩小舎のことともこの時既に述べられている。冷い流れを渡り、ブッシュをわけ

て谷をつめて行くと次第に前穂高がせり出してくる。はじめて登山者の眼にふれた穂高の内陣の模様は次のように書かれている。

「左手には頭上高く穂高山の切り立つた東の峯が聳え、その山腹の輝く雪溪には頂上の岨々とした岩から崩れ落ちた澤山の岩石の跡が刻まれていた」

北穂高から落ちてくる澤山の出口にある龍を左手にみて、横尾谷をつめ雪溪にでて『右の方に進み、碎けた岩を這い登つて山稜の割目に達した』とあり、現在の横尾々根天狗池鞍部あたりに立つたものである。一行はこの鞍部をこえて槍澤に下り、天候悪化のため槍の登頂を断念し赤澤岩小舎に露營し翌日下山していった。こうしてウェストンはいまの天狗池鞍部に立ち穂高連峰の一角がはじめて踏まれたのである。したがつてこの鞍部はウェストン乗越と稱されてもしかるべきところなのである。

ウェストンはそれから二年後の明治二十六年(一九〇三年)八月嘉門次を案内として徳本峠を越えいまの吉城屋附近にあつた牛番小舎に泊り現在の前穂高に東側から登頂した(17)。八月二十五日二人は午前七時四十五分小舎を出發し梓川右岸の森林中を梓川に沿つて進行し左に折れて『目指す美しい峯の東麓の深い茂みに隠れた小さな急流に達した』とあり、いまの上宮川谷に入つたのであろう。簾を漕ぎ、倒木を乗り越えて森林帯を脱した。

「私達の前には垂直の絶壁がある。その右に廻らねばならなかつた。其處から私達は峻しい山稜

の頂にまで登つたが、その東側には小さな池があつた。山稜の一端から覗くと大きなクローウアル、或はガリを見下ろしているのに気がついた。その西端は穂高山の主尾根まで遠く續いている。一方東の方は急に峻阻な断崖となり、その一端には上方の雪から流れてくる美しい龍が懸つていて萬雷の轟きと共に岩の龍壺に注いでいる」

とこの模様が生じているが、これより推測して二人は宮川谷の途中から右に曲り現在の明神岳東稜の一端瓢箪池鞍部に達したことは疑いない。東側の小池とはいまの瓢箪池を指し、この鞍部より下又白谷を覗いたものとしてみるとその記述は正確である。この鞍部より二人は下又白谷に下降り、これを登つて現在の前穂、明神間の鞍部には出ず直接前穂三本槍東南面の岩稜を攀じ登つたのではないかということとは以下の記述から推定されるのである。

「この峡谷の底に達するには私達の立つていた山稜の頂から殆ど垂直になつた岩の屏風を横切つて下りねばならなかつた。岩は餘り固くなくぐらぐらしていたので、絶壁の面に花糸になつてゐる蔓草を手がかりに下りてゆかねばならなかつた。(中略)そして面白いけれどもはらはらしながらゆつくり一歩一歩踏みしめて峡谷の底へ下りた。それから私達は北の主尾根に向つて方向を轉じた。大きなぐらぐらした岩を急いで登ると十時三十分には峡谷の右の壁に差し出た絶壁の底に達した。(中略)そして再び花崗岩の大岩板を登ると一時間経つて八千五百呎の高さにある最初の雪溪にさしかつた。(中略)雪の上をさ三百呎進むと再び峻しい岩にやつて来た。そしてここから頂上までが全探検中で一番興味深い場所である。岩は私達が今まで出逢つたどれよりも峻しく固いものだった。それで私達は全力を注がなければならなかつたがそれだけにこの登攀は爽快だった。」

そして一行は峻しい尾根に達し、十二時四十五分最高の尖峰―前穂高を踏んだのである。下又白谷の底から北の主尾根に向つて方向を轉じ、最後の登りが峻しい岩登りであつたといふことから、直接いまの三本槍附近の岩尾根に取附いたものと推定されるのだが、私どもの附近は登つたことがないので何ともいへない。嘉門次が後に鶴殿氏を案内したやはりこの方面からの登攀の記録では、明神と前穂高間の鞍部に一たん出てから前穂に到つていたので、ウェストンが果して下又白谷のどのあたりから前穂に到つたかこの紀行からは早計に断定を下すことは出来ないようである。しかし強いといふならば三本槍の東南支稜を登つたとみえたい。それにしても明神岳東稜から下又白谷への下降といい、その谷の登攀といい、いまの登山者でも殆どこのルートからの登攀を行つた者はないのではないかと思われ、全力をつくしてこれに當つたウェストンの激しいパイオニアの精神は高く評價されてしかるべきものである。

「日本アルプス登山の探検」(梓版)の附録にセントラル・ジャパニーズ・アルプスと題する地圖が附されてあつて、ウェストンの足跡が記入されてはいるが、スケールは四十萬分の一で東面より前穂あたりとおぼしいピークに登頂したことは窺えるが、もとより細部のルートを知らずには出来ない。なお参考のため計算してみるとウェストンはこの時三十三歳、嘉門次四十九歳であつた。(つづく)

注および文献

15 日本アルプス登山と探検(第二章) ウェストン著、岡村精一譯(梓書房)

16 ウェストンは農商務省所屬の小舎と書いてはいるが、これは牧場の牛番小舎として随分古く、中島正文氏の山手帖(山と溪谷第百五號)によると明治十三年八月安曇村の住民からその使用願が提出されている記録がある。場所は現在の吉城屋附近といわれる。

17 前出15(第九章)

山岳 (第四十九年)

山岳第四十九年はこのほどようやく發行のはこびとなりました。主な内容は▼マナスル一九五三年(三田幸夫)▼アンナプルナ一九五三年(京大)▼アコンカグア(關根吉郎)▼ハントのエグレスト登頂をめぐる(松方三郎)▼ナンガパルバット登頂(田中榮蔵)▼戦後における學生登山(海外寄稿K2との戦い(ベーツ)▼チヨピカル登頂(アイレス)その他で定價五百圓、會員には四百圓でお頒けしています。

會務報告

役員會

九月 理事會 十五日(木)

出席者 別宮會長、日高、松方副
副會長、植名譽會員
理事入澤、成瀬、小原、沼倉、
辰沼、渡邊、交野、折井、吉阪
大塚

議事 報告

一、第三次マナスル登山隊準備
外貨申請の件、先遣隊の分(五
三二四弗)が九月十三日の渡航
審議會で、正式許可となつたの
で九月二十四日、エール・フラ
ンスで出發するように渡航手續
中である。

本隊の準備として、準備委員會
を設置する豫定。なお本隊々員
決定のための參考として、各支
部からも推薦を願う。(模)
二、第十回國體準備進捗状況
神奈川縣の豫行(八月二十一日)
金坂理事出席した。

國體會長(別宮)の外、大會委
員長、技術委員長等役員の決定
を入澤、渡邊理事に一任する。
第三十回兵庫縣國體に關し、先
般、渡邊理事が神戸に出張し、
關西側と開催地について懇談の
結果「氷の山」は取消して「六
甲山」にて開催の希望あり、兵
庫縣としては、一種目でも減ら
したい意向であるが神戸市で引
受ける豫定であり最終決定を本
會に一任された。(渡邊)

神戸市で引受けるならば、關西
側の意向に基き「六甲山」の開

催に賛成する。

三、學生部近況

先般夏山の報告會を開催した。
遭難対策委員會を指導部と學生
部との共同體とし、一般登山者
を對象として、原案を作る方針
である。

四、「山岳」の件。

四十九年は漸く完成の運びとな
つたが豫定より五〇頁増となり
市販價格を五百圓とした。
五十年の擔當村山理事が第三次
マナスル登山隊の先遣隊に参加
したので交野理事が引續きその
衝に當ることとなり、折井、今
村理事がこれに協力することに
した。右の内容は五十年周年記念
號としてふさわしいものとする
こと、原稿を十二月末締切とし
明年三月に出版するよう努力す
る。

五、支部長會議開催の件

九月十八日(日曜日)午後二時
半より本會圖書室で開催する。

十月 役員總會 十二日(水)

出席者 植名譽會員、理事、入澤
成瀬、沼倉、交野、辰沼、今村
千谷、村木、外山、大塚、金坂
折井、評議員、沼井、神谷、岩
永、村井、初見圖書委員

報告

一、第三次マナスル登山隊準備

(1)先遣隊は豫定の通り九月二
十四日羽田を出發、貨物も十月
日にカトマンズへ到着。八日に
カトマンズを出發してサマへ向
つてゐる。(2)九月二十五日
ヒマラヤ準備委員會を設置し別
掲の如く各擔當委員を決定した。
(3)隊員詮衡には各支部長
からも推薦を願つてゐるので慎

重に決定する。(4)總經理は先
遣隊の分を含めて、二千三百萬
圓であり本隊として一千九百萬
圓の範圍で豫算をたてゐる。
十二月中には裝備一切の梱包完
了するように準備を進めてい
る。(模)

(5)ネパール國王王弟夫妻が九月
十八日に來朝されたので、十月
六日、三井クラブで秩父宮妃殿
下にも御出席をいただき山岳會
主催の歡迎會を開催した。

二、佛山岳會フレンド氏並にシャ
ベル夫人歡迎會
滯日中の兩氏を圍んで十月四日
三井本館會議室で歡迎會を開催
した。なお十月三日、東京ヴィ
デオ・ホールにて毎日新聞社
と共催の左記講演會を開催し
た。

1「アルプスの登山」フレンド
2「私のヒマラヤ初登頂」シャ
ベル夫人
三、山梨支部主催縣民大會登山に
出席の件。九月二十三日、二十
六日に亘り縣民大會を兼ねて、
金峯山を中心に登山實施され、
沼倉理事が出席した。

四、第十回國體準備状況
十月七日國體委員會を開催、本
會より渡邊、千谷、金坂、折井
出席して大會役員を決定した。

大會委員長 尾關兼任とす。
技術委員長 渡邊本會理事。
なお大會名譽會長に武田名譽會
員を推す。(入澤)

五、監事加藤泰安氏辭任申出の件
仕事の都合により辭任の申出あ

り、常務理事會に計り、これを
受諾した。監事一名缺員のまゝ
として補充せず。(入澤)

六、會計報告、沼倉理事より九月
度の月例會計報告あり。

議事

一、五十周年記念事業に關する件
1記念講演會及び晚餐會を左記
の如く決定する。

日時 十一月二十六日、十四時
場所 國際文化會館
講師 武田名譽會員、松方副會
長、今西評議員にお願ひ
する豫定。

2記念繪葉書
四枚一組とし、壹千五百組。
頒布價格五拾圓程度のものを
製作する。原畫は茂木、石井
中村、足立畫伯の作をお願ひ
する。實行委員 交野、神谷
初見にて具體的に實行する。

3山岳記念號(五十年)
本文内容その他を諒承する。
なお沼井評議員より「定款」
を是非掲載するように要望あ
り。

4「山岳」索引出版の件、三十
七年までは、沼井評議員が整
理されてゐるが、其後のもの
についても引續き整理の上、
出版の準備をする。

二、圖書基金の件、初見委員より
提案。法政大學出版局で「安全
なる登山(假稱)をJ・A・C編
として、出版の希望あり、この
出版による収入を圖書基金の一
助としたい。執筆者を本會にて
指定することにして渡邊、金坂
兩理事に具體的に取りあげるよ
う依頼する。

十一月 臨時役員總會

日時 十一月七日(月)六時半

場所 本會圖書室

出席者 別宮會長、日高副會長、
植名譽會員

理事 入澤、成瀬、沼倉、外山
今村、金坂、折井
評議員 沼井、神谷
會報編集委員 山崎

報告

一、マナスル登山準備状況(模)
(1)先般・A・P電にて先遣隊が
サマで再び阻止を受けたとの報
は、A・P本社に問合せの結果、
その事實はなく誤電であることを
確認した。(2)本隊メンバー
決定はかねて各支部長からも推
薦を願つてあり、それにヒマラ
ヤ經驗者を併せて選考の結果別
掲の如く決定した。(3)本隊出
發は明年一月中旬として、すべ
て船便を利用する豫定である。

二、第十回國體報告(金坂)
(1)十月三十日の開會式より十
月三日の開會式に至るまで天候
に恵まれ事故なく終了した。
(2)運営について全般的にお祭
騒ぎになるような傾向が見受け
られて來た。なお細部に關して
は別に批判會を持ちたい。(3)
本部より本大會の役員として左
記参加した。別宮會長、日高副
會長、入澤、渡邊、千谷、折
井、金坂理事、他各コースのサ
ブリーダーとして大塚、村木理
事、松澤、石坂。

三、五十周年記念事業(折井)
(1)記念講演會並に晚餐會は、
十月役員會にて決定の如く十一
月二十六日(土) 國際文化會館
にて開催と決定した。講師は松
方副會長、今西評議員の承諾を
得たが武田名譽會員は當日旅行

のため、高野名譽會員に御願ひする。

(2) 記念繪畫は四枚一組にて内容を中村畫伯に相談の結果、茨木氏の遺作から一枚を決定した上石井、足立、中村畫伯の會同を願ひ各々執筆内容を決定し十二月中旬までに作るように準備中(3)「山岳」五十年編集の豫定原稿は、ガネッシュ執筆者堀田氏病氣のため代替者を依頼している外は豫定通りに進行している。なお沼井評議員執筆の五十年史並に年譜は、費用が許せば別刷附録として上梓した。(別途刊行費の調達方法なし、「山岳」に組み込むとする)

フレンド氏歓迎會

十月四日本會では三井本館會議室でフランス山岳會フレンド氏並にシャベル夫人歓迎會を開き、別宮會長より次のような挨拶がまひた。

President's Address at the welcome party of Mme Provrier Chapelle and M.E. Frendo

First of all, I have to beg your pardon to speak in English, because I can not speak French.

Our guests Mme. Provrier Chapelle and M. Eduard Frendo, ladies and gentlemen! It is with great pleasure to welcome Mme. Provrier Chapelle and M.E. Frendo in the name of Japanese Alpine Club. We, the member of Japanese Alpine Club, are very glad that they visited Japan just only to see

the scenery of Japan and to walk or climb some Japanese mountains.

I was told that Mme. Provrier Chapelle and M. Frendo visited Kyūshū and Kansai district already. I would like to know how did they find Japan. Later they will visit Mt. Fuji, Kamikōti and Nikkō. After that they are going to climb Mt. Tsurugi and walk through the valley of Kurobe gorge.

I appreciate the beautiful slides of French Alps last evening, so far as I remember the coloured leaves of French Alps in the fall was just of one shade, namely yellow.

But the shade of the coloured leaves in Kurobe valley, in the middle part of October, covers a wide range from green, yellow, red even to purple, which I admired with Mr. Iwanaga, present to night, in 1929, when the trail of Kurobe george was first completed. I am a sure that Mme. Provrier Chapelle and M. Frendo will be quite satisfied with that. I would like to propose to drink for the health of Mme provrier Chapelle and M. Frendo. Thank you.

ヒマラヤ登山隊寄附

(敬稱略)

- ▽五千圓 秋田縣山岳連盟會長 荒巻廣政
- ▽壹千圓 島中善哉
- ▽參百圓 秋田縣湯澤南高校山岳

累計 部 高添 致
金九千百圓

圖書基金寄附(敬稱略)

- ▽參百圓 近 璋太郎
- ▽參百圓 南 川 和 義
- ▽貳百圓 小 松 寛
- ▽百五十拾圓 鹽 田 輔 雄
- 累計 金貳萬貳千五百圓

昭和三十年十一月廿五日發行

東京都千代田區
神田駿河臺四ノ六

發行所 社人 日本山岳會

編集者 山崎 安治

電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番

東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

登山用具の専門店

好日山莊

プライスリスト進呈

東京店 海野治良
中央區銀座西二ノ五 電話京橋(56)3600
大阪店 西岡一雄
北區堂ビル前 協和銀行三階
神戸店 島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一